今、街に出て学ぶ高校生

高校生フェスティバルの活動から

三井　陽子
同朋高校教諭

私は、「愛知県高校生フェスティバル実行委員会」（略称「高校生フェス」）の顧問をしている私立高校の教員です。「高校生フェス」では、毎年春と秋に五千人から一万人を集める高校生のフェスティバルを企画運営したり、ボランティア活動や生徒会・学園祭の交流等、幅広い活動を行っている高校生の自主的な団体です。現在実行委員は、私立高校生を中心として、四十校に約三百人。実行委員はすべて有志です。

ここに集まってくる生徒は、ごくふつうの高校生。成績で言えば進学校の子から中・底辺校の生徒まで実にさまざまで、ルーズソックスにミニスカート。ポケベル、ＰＨＳをもって茶髪の子もいれば、まじめないじめられっ子もいる。どこにでもいるような高校生の集まりです。

しかし、この高校生たちがやっていることは、世間の人が持っている高校生のイメージとはずいぶんちがった面があります。

この文章では、「高校生フェス」の活動を通じて感じている、現代の高校生のもうひとつの姿を紹介して行きたいと思います。

□　「大学の授業が楽しい！」――ある卒業生の話

先日、「高校生フェス」の本部がある「私学会館」に、

この春高校を卒業した元実行委員のYさんが訪ねてきました。彼女は今、ある私立大学の一年生。

「大学は楽しい？」

「めっちゃ楽しい」

「何がそんなに楽しいの？」

「授業！」

というので、「へえー」と驚いて、詳しく話を聞いてみることにしました。

「授業が楽しい」そんな答えが返ってくるとは、予想もしませんでした。勉強嫌いで、授業中もよそごとをやっているような生徒だったと聞いています。自分の高校と同じ学園の大学へは推薦してもらえず、ほかにいくつか受験したところも落ちて、最後に受けた新設の学部にかろうじて合格したのでした。

彼女が話してくれたことは大変興味深く、私たち顧問が「高校生フェス」の指導の中で目指していることや、「愛知私教連」（愛知県私立学校教職員組合連合）の授業改革・学校改革の運動とも深く結びついているように思ったので、彼女に手記を書いてもらうことにしました。以下はその抜粋です。

私の高校生活は、「愛知県高校生フェスティバル実行委員会」の活動（以下「高校生フェス」）とボランティアに明け暮れた三年間だった。その中で学んだこと、考えたことは今の大学生活の中で大きな意味を持つ。その時に持った疑問や体験は、大学の講義で解かれていく。時には「ハッ」とすることもある。だから今、大学の講義が待ち遠しいし、楽しくて仕方が無い。もちろん学生生活も楽しい。

「高校生フェス」で活動していると、たくさんの人たちと出会う。そこでは複雑な人間関係もあり、当たり前に意見の食い違いもある。そんな中で互いに認め合う事を覚えた。分かり合えた後というのは自然といろいろな話をするようになる。そこで新しい人間関係が生まれる。その仲が深まり、互いに知り合いを紹介したりすると、そこでも人間関係が生まれる。その繰り返しでたくさんの人と出会ってきた。その事が今、大学で受けている「ネットワーク論」の講義と重なっ

みつい・ようこ●一九五九年、静岡県生まれ●愛知県高校生フェスティバル実行委員会顧問●「高校生フェスティバル」や「サマーセミナー」など、愛知の私立高校では学校の枠を越えた新しい教育を模索する活動が旺盛に行われています。詳しくは『大きな学力』（寺内義和著、労働旬報社）をご一読ください。

た。

私が「高校生フェス」で知り合った人たちを数え上げるとたいへんなことになる。なぜならそれはとても大きなネットワークになるからだ（高校生フェスの場合、いろいろな高校との結びつきができる）。人はこのネットワーク内で自分の居場所が心地よいところに身を置くという。意心地の良いところというのは自分と似た者がいるところになる。自分に当てはめて考えると「そうかもしれない…」と思った。こんな些細なことと思うかもしれないが、講義中に言葉で言われると当たり前のことでも感動することがある。

また、私は「高校生フェス」の活動の一環として、「阪神淡路大震災でお父さん・お母さんを亡くした中学生高校生に奨学金を贈る中学生高校生の会」の活動に参加し、毎月十七日に栄で街頭募金を行ったり、何回か神戸へ行きボランティア活動を行ってきた。その中での体験が、今、「高齢社会論」の講義と重なり、なるほどと思うことが多い。

私は高二の夏に神戸（北区にある仮設住宅）に三週間滞在し、ボランティア活動をした。そして戻った後の感想文にはこう書いた。

「仮設住宅各所帯を見つめると、お年寄りがとても多く、そこだけが『超高齢社会』という感じがした。家に閉じこもってばかりで、孤独になってしまいアルコール中毒など心身的な問題にまで発展しているのだと思った。

これは将来の日本の姿にも見えた。」

今振り返ると、「ボランティア」という言葉を使っていろいろな人と関わり、いろいろな社会の状態、社会現象を見てきたが、大学生になり、その体験が講義によって体系づけられていくのが、楽しくて仕方がない。そして、自分は活動の中から知らず知らずのうちに勉強していたと言うことを実感した。自分の世界も広がった。だから「ボランティア」という言葉を使うのは相応しくないと思った。それは自分の目で現代社会を見つめ、考えるきっかけに過ぎない。私は活動の中からいろいろなことに興味関心を持ち、自分から行動することを学んだ。また、自分は社会の一員だということも感じさせられた。

Yさんは今、大学で「コミュニティ政策」を専攻しているそうですが、高校時代のさまざまな体験が、勉強してい

く上での問題意識となり、また、講義で聞いた言葉が体験によって裏打ちされていくというというのです。このような大学生が今の大学にどのくらいいるのでしょうか。偏差値の高い大学へ行っている学生よりも、中身のある勉強をしているのではないかという気さえするのです。

□　何か役にたつことをしたい

文中にある「阪神淡路大震災でお父さんお母さんを亡くした中学生高校生に奨学金を贈る中学生高校生の会」（略称「奨学金を贈る会」）は、震災のあった直後に高校生フェスの呼びかけで、県下の約五十校の中学高校の生徒会や有志が集まって結成され、被災地への救援活動や震災遺児へ「奨学金」贈る活動をしてきました。これまでに集められた募金の総額は千五百万円を超え、約二百人に六～七万円の「激励金」を贈ることができました。現在でも毎月十七日には栄の街頭で募金活動を続けています。

神戸フィールドワーク
被災者から話を聞く（須磨区下中島避難所）

震災から三周年の今年一月十七日には、約百五十人が募金活動に参加し、一日で六十万円の募金が寄せられました。

また、この六月には「神戸フィールドワーク」に出かけました。その時、とても印象的なことがありました。バスが、神戸市西区の仮設住宅に着いた時のことです。それまでにぎやかに騒いでいた生徒たちが、急に静かになってしまいました。見事に復興した三宮周辺のにぎわいや新しく建てられたニュータウンの外国のようなきれいな町並みを抜けてたどり着いた、高台の吹きっさらしに建つ倉庫のような仮設住宅群はあまりにも寂しく、別世界のようで、思わず絶句してしまったのです。テレビや新聞を見ているだけでは、こんなことはとてもわかりません。

「神戸フィールドワーク」では、仮設住宅のほか、下中島避難所、シルバーハイツ（高齢者用住宅）を訪問して話をうかがったり、被災者の方の案内で、いまだに空き地や

プレハブの目立つ長田区を歩いたりしました。

「崩れた家の下からうめき声が聞こえるのに、火が迫ってきて助けられなかったことがどうしても忘れられない」等、訪問先で、被災者から面と向かって聞いた体験は、高校生の胸に深く刻まれたにちがいありません。

このような活動に、短期間の呼びかけですぐにバス一台分の高校生が集まります。しかも、交通費等一万円を自己負担で参加してきます。今の高校生に、「本物を自分の目で見て確かめたい」、「何か人の役にたつことをしたい」と言う要求があるためではないかと思います。

□　まじめに自己や社会を語り合いたい

今の高校生は、個人主義的で、社会のことに関心がなく、人づきあいが下手で、クラス活動や学校のクラブ活動、学園祭なども停滞していると言う話を聞きますが、本当にそうでしょうか。

むしろ、過熱した受験競争の中で、高校生どうしの連帯を妨げ、社会や政治に目隠しをして高校生を腐らせてしまっているのは親・教師・学校・社会ではないでしょうか。

高校生フェスの活動を通じ、息苦しい学校の中から解き放たれた生徒たちが、外の世界の風に当たって蘇生してゆくように感じることがあります。

「高校生フェス」で春や秋にフェスティバルを開催する時、何ヶ月もかけて企画づくりの討論をしていきます。その中で思うのは、生徒たちは、「何か手応えのあるもの」、「本当の人とのふれあい」、「まじめに自己や社会について考えたり語り合ったりすること」を求めている、ということです。

この春は、名古屋市昭和区にある「愛知県勤労会館」を全館借り切って「新入生歓迎フェスティバル」を

新入生歓迎フェスティバル（98年５月３日）
「シンポジウム～本当に楽しい学校って何？」

おこない、約五千人が参加しました。
ステージではバンド演奏、クラブのダンスや、タレント（赤坂泰彦）のトークショー、コントや替え歌による「一分間学校紹介」のあと「少年犯罪」をテーマとした創作ミュージカルを上演しました。このミュージカルは、たくさんの学校でのアンケートや、弁護士、新聞記者、教護院などへの取材を元に創作したものです。
小ホールでは、カラオケ・ゲーム大会。そして、埼玉所沢高校、京都桂高校、文部省の生涯教育局長の寺脇研氏を招いたシンポジウム「本当に楽しい学校って何？」を行いました。この企画は、ある進学校の生徒が、「なんのために学校へ行くのかわからない」とつぶやいたところから始まった企画です。参加者は教師・父母も含め三百五十人。生徒の権利、校則、授業、先生との関係などについて約二時間にわたって真剣に討論が行われました。
ほかにも文化部の交流やボランティア活動の交流コーナーで手話講座など、いわゆるお遊び企画だけでなくまじめな企画にも会場いっぱいの参加者で、勤労会館は終日超満員。雨にも関わらず、勤労会館の前には長蛇の列が並び、会館の職員がうろたえるほどの盛況ぶりでした。
取材に来た新聞記者が、「どうしてこんなにたくさんの高校生が集まるんですか？」と目を丸くしていましたが、ひとことで言ってしまえば、それが高校生の要求にあっているから、ということでしょうか。

□　高校生が栄で二〇〇〇人パレード

「高校生フェス」が結成されたのは十二年前。私学の父母と教師が毎年秋に行っているフェスティバルの中で、七百人の大合唱を企画したのが最初でした。それから、ミュージカル、豊橋～名古屋七十キロピースウオーク、日仏高校生シンポなど、その時々の実行委員たちによって様々な挑戦が続けられてきました。
九六年秋の「ビッグフェス」では、高校生のさまざまな要求や願いを掲げて名古屋の栄で「二〇〇〇人パレード」をしました。
パレードそのものは、春・秋のフェスの前夜祭として、数百人の規模で毎年行ってきており、生徒たちがもっとも連帯感を感じる「好きな」企画です。仮装して鳴り物を持って、フェスの宣伝チラシを撒きながら車道を練り歩くのです。
それを、「秋のビッグフェス」本番のメイン企画とし、単にフェスの宣伝をするだけでなく、各学校で自分たちの

要求や活動を紹介するプラカードや横断幕、みこしｅｔｃ、をつくって参加しよう、と呼びかけました。

当日、集合場所の栄の久屋広場には、地下鉄出口から続々と生徒の波が押し寄せて来ました。

生徒たちが掲げたプラカードや横断幕のメッセージをいくつか拾ってみると、

「消費税五％大反対！国民の意見を聞け！」（安城学園）

「私たちを人間扱いして！」

「選挙権を十八へ」（名古屋第一）

「おい！地下鉄てめー運賃たけーんだ」

「男子校を廃止せよ！男だけの青春はいやだ」

「愛知万博反対！緑を壊さないで」

2000人パレード（96年11月３日）

「制服自由化！」、「私学助成ＵＰ！」（同朋）

「元気出せ高校生！君のことだぞ」、「セクハラ×」

「社会の流れにのまれるな　常に自分らしさを持って」（千種）

「厚生省なにも隠すな!!」

「ＡＩＤＳはひとつの病気です。特別あつかいしないで!!」

「薬害根絶　署名にご協力お願いします」（エイズ企画）

「昼休みに外出するのを許せ！」

「モンゴル支援」、「夢を持って生きよう」

「日本に米軍基地はいらない、安保条約は破棄せよ」

「もっと学校を楽しもうよ」（安城学園）

「みんなとともに生きる社会を」

「先生も生徒も生き生きした学校を作ろう」（高校生フェス本部）

当日、生徒たちが手にして歩いていたプラカードや横断幕の言葉を見て、予想以上にまじめな内容が多いのに驚きました。これまで、こうした形で、自分たちの要求をかかげ、街の人にアピールする、という機会がなかっただけで、潜在的には、大変まじめに社会の問題を考えている高校生も多いのだと実感したのです。

この二千人パレードを組織する過程で、各学園でさまざまな取り組みがありました。

安城学園では、高校生フェス学内実行委員会で全校に要求アンケートを取り、その中で多かったものベスト四十を「たすき」に書いてパレードしたり、三年のあるクラスでは、クラスで話し合った要求項目を段ボールに何枚も書いて、クラスの大半が参加しました。

同朋高校では、一年生のクラス連合（各クラスの委員長副委員長の連絡会議）で、パレードへの取り組みを話し合い、一年生全員に自分の願いを折り紙に書いてもらい、それを横断幕に張り合わせました。

薬害エイズに関してのプラカードが多いのは、「ビッグフェス」の「エイズ企画」で、東京ＨＩＶ訴訟の原告の方の講演などを行ったためです。実名公表していない原告のＳさんは、この日車椅子でいっしょにパレードに参加してくれました。

パレードをしていて、印象に残ったことは、沿道の人たちの温かいまなざしです。学校ごとに大声でエールを掛け合う姿、真剣な表情でプラカードを掲げる顔。ルーズソックスにミニスカートの女の子たちが、「消費税五％反対」という看板を持って、明るく元気に駆け抜けていく姿を、ほほえましい表情で見送る街の人の姿がありました。

□　「街とつながる学校」へ

高校生フェスが一九九六年の秋のフェスで発表した「高校生宣言１９９６」の中に、次のような一節があります。

「…こうした活動は、学校を飛び出し、街の人の声援を受けて社会とつながる活動だ。誰かの役に立つことはとても楽しい。教科書で習うことだけでなく、人間として生きることを学んでいる。そして、私たち高校生にできることがたくさんあることを教えている。街の人たちの高校生への期待も大きい。」（「高校生宣言１９９６」より）

今、高校生フェスでは、「学校改革」をテーマのひとつに掲げています。めざすのは、「生徒が主人公の学校」、「人間として生きるための、本当の学力をつけてくれる学校」、「誰もが輝ける場のある学校」。

そうした学校にしていくために、教師、父母との連携や、地域へ学校を開放して「街とつながる」ことで学校を変えていこうとしています。

「街とつながる」ことで、前述のボランティアの例にもあるように、まず、高校生自身が変わっていきます。

高校生フェスの活動がひとつの触発となって、それぞれの学校でも、「街に出ていく」、「街の人から学ぶ」といった活動が旺盛に行われるようになってきました。

こうした各学校での活動を交流しあうのが、二月の「スプリングセミナー」で、今年は約四十校から六十本のレポートが発表され、三百人が参加する熱気あるものになりました。生徒たちは、体験から学んだことをさまざまな言葉で語っています。

たとえば、ここ数年名古屋でも急増している「野宿労働者」への炊き出しに、教会の人たちといっしょに参加している高校生がいます（聖霊、東海）。参加した生徒がこんな感想を話していました。「野宿の人たちが、怠けて働かない人たちだという偏見が間違いだったということに気づきました」「自分たちは本当の事を知らない。知ろうとしていなかった」

また、神戸まで歩いて被災地支援を訴えながら募金活動を行った桜丘の生徒は、「街頭に出て募金をしていると、数十分も説教する人がいた。社会に出てみれば、いろんな人、考え方があると身をもって知ることができた」と語っています。

「神戸仮設ボランティア」に、学校の「土曜講座」の一環として神戸へに行った豊川高校の生徒の感想は、「マスコミは一番知りたい事を報道していない」。

「奨学金を贈る会」で年末に仮設住宅で餅つきボランティアに参加した生徒は、「高層ビルの建ち並ぶ都心に、ずらっと並んだ仮設住宅を見て驚いた。」という感想とともに「（高校生が毎月街頭で募金活動を続けていると聞いて）若い人たちが、まだ忘れないでそうやって活動してくれている、と聞くだけで涙がでてくる」という仮設住宅の男性の言葉を紹介しています。

こうした活動の中から、教室の中での、一方的な講義式授業では学べないことを生徒たちは学んでいます。

□　「大きな学力」の源泉

このような、これからの時代を生きていくのに必要な力を、「大きな学力」という言葉で愛知私教連の寺内義和委員長がまとめています。（『大きな学力』労働旬報社）

「大きな学力」の基本的な力として「目標を作り、それを追求する力」、「生きて働く知力体力感性」、「関係を広げ、深める力」をあげ、その源は「波風の立つ体験――絶望、感動、達成感、発見、出会い」や「主体的体験――参画と挑戦」にあるとしています。このような視点は、「高校生

フェス」で生き生きと活動する生徒群像やそこから広がった高校生の活動を目の当たりにする中で得られたといってもいいでしょう。

外に出てさまざまな触発を受けた生徒は、その関心を、学習・授業に向けはじめます。

七月には今年十回目になる「サマーセミナー」が豊橋の桜丘高校を会場に開催され、教師・生徒・父母・市民が講師になって八百五十の講座が開かれ、約三万人が参加しました。

その中で、「高校生フェス」もたくさんの講座を開いています。「臓器移植について」、「キレルを考える」、「神戸フィールドワーク報告」、「少年犯罪と援助交際をどうみる」、というまじめなものから「女子高生が教えるブラジル料理」、「ダイエットお菓子の作り方」までさまざまです。資料を準備し、教室の前にたって説明したり、ディベートを行ったり。こうして、ただ受け身で聞く授業より、多くのことを学んでいるにちがいありません。

教師・学校の側でも、授業そのものの見直しは始まっており、週休二日制を利用した土曜講座でフィールドワークや体験学習、市民講師による授業がいくつかの学校で始まっています。私の勤務する同朋高校では、「自由選択講座」（土曜講座）の「カリキュラム委員会」を教師・生徒・父母の参加で行います。それぞれがやってみたい講座、やってほしい講座を出し合うのです。「自由選択生徒運営委員会」では、全校生徒にアンケートをとって、生徒の要望に応える講座づくりに取り組んでいます。

「高校生フェス」が作り出す学校の垣根をこえた交流、「サマーセミナー」のような巨大な実験場を触発として、今、高校教育そのものも大きく変わりはじめています。